

カダールフェスタ(市民活動企画展)参加

— 国賠同盟県本部(女性部) —



寒中とは思えない暖冬小雪の一月二十二日、今年で二十二回目になるカダールフェスタ(市民活動企画展)が、アウガで開催されました。三十七団体が参加。国賠同盟女性部は「新しい戦前にさせないために―戦前、平和と人権を訴えた女性たちから学ぶ―」をテーマに、十八名の参加者を迎えて、熱い話し合いが行われました。

開会挨拶で、能登半島で救援活動が続くなか、陸上自衛隊が七日「降下訓練始め」を実施。ヘリや輸送機が多数参加しました。

「救助が必要な時、訓練でなく物資輸送をすべき」との声があがっていますが、被災地に全力をそいでほしいです。自衛隊でなく、災害救助隊に名前を変えたら良い、という意見も出ました。

始まりは、「青い空は」と替え歌「青い森ふるさと」を合唱。次に相沢良の紙芝居の上演です。これは、今は衆院議員の高橋千鶴子さ



No. 596

編集発行人 田中幹夫
治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟

〒113-0034

東京都文京区湯島2-4-4

平和と労働センター全労連会館内

電話 03-5842-6461

FAX 03-5842-6462

振替 00110-6-97793

定価 50円

青森県版

2024年2月15日発行

第 380 号

〒030-0904

青森市茶屋町11番5号

TEL 017-718-3166

FAX 017-718-3167

青森県本部

▼一月十五日発行の不屈でNo.594となっておりますが、正しくはNo.595の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。

▼能登地震でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに被災された皆様にはお見舞い申し上げます▼さて、私事ですが、母が入院しました。その時理事長先生から「〇〇さんですか。お母さんが高熱で入院されました。つきましては高齢になると延命治療は行わないことに同意してください。」また、飲み込みのリハビリでも起こりうるので合わせて同意をお願いします」と。何言ってるんだ、病状は？病名は？と尋ねると「まだ何とも言えない」と話すいきなり命にかかわる話になるとは思わなかった。高齢になると命の価値が下がるのだろう▼テレビをつけると毎日のように人殺しのことがニュースに流れている。最も人命を軽んじるのは、戦争である。ウクライナやガザをみると明らかである。命を大切にすると日本人として、核兵器禁止条約を批准し、ロシア・イスラエルをはじめ世界に命の重みと平和を訴える国になることを望む。

(R)

山毛榉
ぶな

んが描いたもので、特徴的な場面の絵と二人の素晴らしい読み手のおかげで、みんなとても感動しました。その余韻を引きずって自己紹介です。



・「憲法九条のことが書いてあったので参加しました。」
 ・「今の情勢が心配です。」
 ・「戦争体験はありませんが、戦後の何も無い生活が本当にメチャクチャで、とても苦労しました。学校では、弁当を持って来れない子どもたちもいました。」

初めて参加された方々の発言です。また実際に戦争を生きて、むごい場面を見てきた人は「戦争だけは絶対イヤだし、やつてはダメ。」この言葉に反対する人はいないはず。「憲法を守って、この自由な世の中を次の世代に渡したい。」熱い思いが語られました。

続いて、テキスト「伊藤千代子・相沢良の青春と治安維持法」を読み合わせ、その後自由な話し合いになりました。「戦争と弾圧は手をつないでやってくる」という言葉がありますが、弾圧の嵐が吹き荒れた時代に、どうして命をかけてまで、反戦・自由・平等を求めて活動することができたのか。そこが大きな疑問と驚きです。テキストによれば、「人間として優れた資質に加え、熱心な学習により二人は、歴史の必然に確信を持って活動した。」とありました。

深くうなずくしかありません。今漠然と、戦争に対する不安を持つ人が多いようですが、タモリさんの言う、新しい戦前にさせないために、私たちは何をすべきなのか？ それは、今日参加された皆さんからも発言がありました。声をあげていくこと。今だからこそ、まわりの人々に声を届けることがとても大事だと。

まだまだ話したりない思いでしたが、次回を約束し



て閉会の言葉があり、終わりに、岩岡淳子さんの歌った「一本のえんぴつ」が心に残りました。

そして、一番大事なことを、鎌田さん(前県同盟事務局長)が呼びかけました。政府は今だに治安維持法犠牲者に対して、謝罪も反省もしておりません。それは当然のことです。「当時、治安維持法は適法に制定され処理してすべて終わっている。」という認識、つまり合法であったからです。であるなら、いつかまた再び同様な弾圧が始まるかもしれない。とても恐いことです。国賠同盟の大きな二つの柱、戦争反対はもちろんですが、いかなる弾圧も決して許さないと声をあげ続け、行動していくことがとても大事です。

締めにあつたわしい、気持ちの引き締まる発言をいただきました。(池辺せつ子)

—『太平洋戦争』の名称は正確?—

先の戦争は「太平洋戦争」とも言われ、対アメリカとの戦争のみが強調されています。しかし、同時にこの戦争は中国、東南アジアに対する侵略戦争でもありました。

今から82年前の1941年12月8日北海道エトロフ島に極秘裏に集結した日本連合艦隊は真珠湾を攻撃。同日同時刻(2時間程の誤差あり)日本陸軍はマレー半島に上陸しシンガポールに進軍。またタイ、フィリピンにも攻撃を開始、半年間で東南アジアの主要部を占領しました。

つまり、先の戦争は「アジア・太平洋戦争」との名称が正確です。(K)



二〇一三年十二月八日集会
—青い森公園にて—



エッセイ

私が出会った子どもたち……⑥2

それぞれ訳があるのです

パーカーのフードを引っばってしまった

相談室 工藤 ふみ

5/21 5年 さえ
昨日の放課後、私と怜さんとみささんとマラソンをしました。

私の前に瑞さんとめいさんがマラソンをしていて、「ずいずい」と、めいさんが言っているのを聞いて、私も調子に乗って、
「ずいずい」とか「ずいずいずつころばし」とか言ってしまいましたが、怜さんも言いました。

そうしたら、わたしや怜さんの頭をたたいて、背中をひっぱりました。それから何周かして、また瑞君達と会った時、私はまた、
「ずいずい」と言いました。そうしたら、ずい君が私のことを追いかけてきて、頭をたたいて、せなかを引っばって

それを見ていた怜さんが、「やめたほうがいいよ」と言って、瑞君が、その言葉におかついたみたいで、怜さんの服のフードを引っばって、フードがやぶけました。

5年生でクラス替えをしたばかりの春のことでした。子ども達は私に慌てて教えに来てくれました。瑞君が服を破ったと。私は、怜さんの保護者にパーカーの帽子の部分が破けたことを電話でお知らせしました。電話口でお母さんは、大きな声で「あの乱暴な瑞と一緒にしないでくれと言ったから3、4年生で離れてくれたのに、また一緒にやってしまった。どうしてくれるんだ。パーカーは弁償してもらう」とのこと。私は1、2年生のことは分からなかつ

絵手紙

野坂峯子 (東青支部)



能登半島支援
さ、早く

たものの、なぜパーカーを破るようなことになったのか。瑞君に聞くことにしました。彼には発達障害があります。自分のことを言葉でなかなか上手く言えません。やつのことで、お母さんに聞き取ってもらって分かったのは、3日後でした。彼は、1、2年生の時、整列ができませんでした。そこで、当時の担任は、隣の列の怜さんに集会の時、瑞君をきちんと並ばせるように頼みました。真面目な怜さんは、ちゃんと並ばせようと、引っぱったり、突っついたりしていたようでした。それが彼はとても嫌で、叩き返していたとの事でした。

そこで、放課後あったことを書いてもらい、みんなで読み合い、考えてもらいました。誰かが「めいさんが言っても怒らないのに、なぜさえさんたちが言ったら怒ったのだろう」と言いました。そうしたらだれかが「友達だからじゃない」と言いました。また、「怜さんは瑞君には注意したのに、なぜさえさんに注意しなかったのだろう」と誰かが言いました。そこから友達について考えてくれました。その時の感想が次の文です。

わたしは、自分の名前でわざと変な言い方をされればいやな気持ちになります。わたしは、マラソン

をしているとき、さえちゃんを瑞さんが追いかけて通り過ぎるのを見ただけで、鬼ごっこだと思っていました。少し瑞さんが笑っているように見えたからです。この出来事を話して、瑞さんが

いやな気持ちだったんだなとわかりました。わたしは、仲良しな友だちからニツクネームでよばれても、仲良しだから何もならないけど、あまり知らない人からその名前を知らかうようによばれるといやな気持ちになります。暴力はいけないと思うけど、瑞さんにもわけがあるんだと感じました。話し合うというんな意見が出てきました。私が一番分かったことは、めいちゃんとは仲がいいから「ずいずい」と呼ばれても変な気持ちはしないけど、あまりしやべった事がない人に言われればいやな気持ちだと思います。

花

さえさんと怜さんは、瑞さんがおこっていることをきかず、からかってしまったのです。瑞さんは、すぐくいやで言われたくない事を2回も言われて服を引っぱってフーロをやぶいたと思います。めいさんは友だちで楽しく走っていて、あまりいやではなかったし、一回くらいしか言っていないと思います。だけど、言われてきづつくことを、あ

まり話をしない人に二回も言われて、すぐきづついたと思います。瑞さんは楽しくマラソンをしていたと思うので、「ずいずい」とか「ずいずいずい」ってよばれて、すぐおかついたと思います。だけど、服をひっぱたりするのはだめだと思います。そして、怜さんに「だめだよ」と言われた時、きつと、さつき自分をばかにしてたのになと思っただと思います。でも、フーロを破いたりしてはだめだと思います。でも、きつと悔しかったです。虹

このことがあったおかげで、瑞君のお母さんから瑞君の障害についてみんなに話してくれと頼まれ、子ども達に話しました。その後、「ぼくのお姉さん」(著・丘修三)というお話を読みました。瑞君は、学級の中で認められる存在になりました。そして、このこと以来、彼の叩くことで嫌だと表現することはぴたりとなくなりしました。時間を割いてでも、みんながじっくり本音で話し合う事が集団の中で大事なことだと思っています。